



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 30, 2012, No. 32

【役員名簿(2010-2012)】(五十音順)

代表：村上 清敏 (金沢大学)
副代表：喜納 育江 (琉球大学)
顧問：上遠 恵子
 西村 頼男 (阪南大学(非))
事務局長：豊里 真弓 (札幌大学)
事務局補佐：
 高橋 綾子 (長岡技術科学大学)
 波戸岡景太 (明治大学)
会計：平塚 博子 (日本大学)
 林 直生 (滋賀大学)
監事：上岡 克己 (高知大学)
ニューズレター編集委員：
 辻 和彦 (近畿大学)
 塩田 弘 (広島修道大学)
 山本 洋平 (戸板女子短期大学)
会誌編集委員：
 中川 僚子 (聖心女子大学)
 木下 卓 (愛媛大学)
 小谷 一明 (新潟県立大学)
 加藤ダニエラ (中南財經政法大学・中国)
 高橋 龍夫 (専修大学)
コンピューターセンター：
 岩政 伸治 (白百合女子大学)
 山城 新 (琉球大学)
 北国 伸隆 (秋光塩学院)
評議員：Bruce Allen (清泉女子大学)
 池田 志郎 (熊本大学)
 石幡 直樹 (東北大学)
 岩政 伸治 (白百合女子大学)
 太田 雅孝 (大東文化大学)
 茅野 佳子 (明星大学)
 管 啓次郎 (明治大学)
 高橋 勤 (九州大学)
 高橋 昌子 (三重大学)
 巽 孝之 (慶応義塾大学)
 田中 恒寿 (札幌大学)
 結城 正美 (金沢大学)
 横田 由理 (前・広島国際学院大学)
 吉田 美津 (松山大学)
院生代表：山田 悠介 (立教大学・院)
広報：大野 美砂 (東京海洋大学)
 河野 千絵 (日本大学(非))
 喜納 育江
研究助成：岡島 成行 (日本環境フォーラム)
 高田 賢一 (青山学院大学)
 乳井 昌史 (早稲田大学)
 山里 勝己 (琉球大学)
 野田 研一 (立教大学)
 村上 清敏 (代表)
 喜納 育江 (副代表)

四年の任期を終えるにあたって

代表 村上 清敏 (金沢大学)

あつという間の四年間でした、と言え、それもそのはず、代表らしいことは何もしなかったのだから、という返事が返ってきそう、それには返す言葉もありません。無能な代表であったばかりに、あたら貴重な四年間をいたずらに過ごただけではなかったのかと惧れています。

せめてもの罪滅ぼしのつもりでもなかったのですが、前号のニューズレターでは、やり残した仕事を以下のように列挙しました。
①会のHPの充実、②会誌、ニューズレターの一層の活性化、③2014年、会の創立20周年に向けた出版物の刊行、④財政の健全化がそれでした。これが功を奏したらしく、見るに見かねた会員の方々のお力添えのお蔭で、今回の役員会では、こうした懸案事項への解決の糸口が見えてきましたので、その報告をして、お許しを得たいと存じます。

1 会のHPの充実

写真はフィルム、アンプは真空管、スケジュール管理は手帳と万年筆、旅のお供は時刻表という古い人間ですので、どこからどう手をつけていいものか、まったくのお手上げ状態でしたが、かつてHPを立ち上げてくださった北国さんが見るに見かねてコンピューター・センター委員に復帰して下さり、HPが一新されました。それに伴い、巴山さんや結城さんのお力添えで、フェイスブックやツイッターなるものまでが開始されたとのことであり、さらには、豊里事務局長のご尽力でニューズレターの創刊号以来のバックナンバーが閲覧可能となりました。好むと好まざるとにかかわらず、こうしたデジタル化の傾向には拍車が掛かるのでしょうから、HPのますますの充実を草葉の陰から見守りたいと存じます。

2 会誌、ニューズレターの一層の活性化

早速に、会誌16号では「境界の食風景」という小特集が組まれることとなり、原稿の集まり具合も好調のようですし、また、8月～9月に開催予定の全国大会(近畿大学)では、辻大会実行委員長のご尽力もあって、近年まれにみる盛りだくさんの、

タイトなスケジュールとなっていますので、今後の会誌、ニューズレターの活性化にもつながるものと大いに期待しています。とりわけうれしいのは、院生組織の皆様が、一日目午前中という大会の受け付け前の時間帯に「読書会」を予定してくださっていることです。代表をお引き受けした時から、会の将来を担ってくださる院生の皆様の活躍を応援する必要を感じておりましたので、今回の「読書会」の企画は、これまでの全国大会でのご活躍、HPにおける「用語集」の成果ともども、院生組織の皆様の活動が結実したものと思われれます。

3 2014年、会の創立20周年に向けた出版物の刊行

何を隠そう、昨年の全国大会（明治大学生田校舎）での懇親会を終えて、飲み足りない連中が新宿南口の居酒屋でとぐろを巻いていた折、ふと思いつき、たまたま隣り合わせていた小谷さんに話をもちかけ、「音頭を取って、準備委員会をとりまとめたいただけませんか」とお願いしたというのが、ことの始まりです。今回の役員会で小谷（委員長）、喜納、豊里、結城、巴山の各氏が準備委員に就任すること、また、顧問として、野田、山里、管さんをお招きすることも了承されました。編集方針、スケジュールも併せて承認されましたので、8月の役員会、総会での議を経て、原稿の公募を始めるてはずになっています。2014年8月、会の創立20周年を記念する全国大会会場では、『文学と環境、そのつながりを語る』（仮題）が平積みになっている光景が見られることでしょうか。会員諸兄姉の奮ってのご応募を、今からお願いいたしたく存じます。

4 財政の健全化

放漫会計を見直してきた張本人としましては、本件が一番の心残りであり、任期中に何とか健全化の目途をつけたいと思っていたのですが、心ならずも次期執行部に後を委ねる結果となりました。財政が逼迫している原因は大きく分けて二つあります。一つは、会誌編集、制作の費用が会の予算の多くを占めており、分不相応な会誌となっているという事実です。編集作業の簡略化、校了から発行までの時期の検討、紙質の検討を含めた経費の削減に向けて、引き続き模索を続けたいと存じます。もう一つの原因は、会費の納入率の悪さにあります。残念ながら、会員の皆様の三分の一近くもの方々が年度ごとの会費の納入を失念していらっしゃる。役員会では、あらゆる機会を通じて、そうした方々にリマインダーを出して、会費の納入を思い出していただくよう手を尽くすことが確認されました。

この四年間、喜納副代表、小谷前事務局長、豊里現事務局長には、何かと相談に乗っていただき、いたら

ぬ代表を支えてくださったかばかりか、両事務局長は、実務の大半をこなしてくださいました。また、高橋綾子前会計、平塚現会計は、苦しい家計をやりくりしてくださり、ろくな稼ぎもないぐうたら亭主(?)としては、ただただ頭が下がるばかりでした。会誌投稿規程の改正にご尽力くださった生田前会誌編集委員長、それを引き継ぎ、会誌のさらなる充実にお力添えくださっている中川現会誌編集委員長、さらには、木下前ニューズレター編集委員長、辻現ニューズレター編集委員長のご活躍ぶりにも、あらためて御礼申し上げたく存じます。会員書誌情報の作成・公開にご尽力くださった、新設した広報委員会の三浦前委員長、大野委員、河野委員にも御礼申し上げます。会誌、ニューズレター、会員書誌情報という本学会の三つの顔がきちんと機能したのは、皆様のお力添えがあつてのことです。ありがとうございます。また、院生組織の代表として、院生の皆様のまとめてくださった巴山さん、山本さん、現代表である山田さんにも御礼申し上げます。みなさんのご活躍の成果は、会としての大きな誇りです。それから、節目ごとに相談に乗ってくださり、助け船を出してくださった野田さん、山里さんにはお礼の言葉もありません。お蔭様で、何とか無事に次期代表にバトンタッチができそうです。最後に、全国大会でお元気な姿を見せてくださった上遠恵子顧問、昨年の全国大会では、エクスカッション終了後、昼間の蕎麦屋での酒盛りまでお付き合いくださった西村頼男顧問には、いつまでもお元気で会をご指導くださいますよう、あらためてお願い申し上げます。

これ以上お名前は挙げませんが、役員の方々、会員の皆様方には本当にお世話になりました。この四年間を振り返りますと、清里高原、新潟松代、明治生田校舎でのそれぞれ充実した研究発表、シンポジウム、さまざまな企画、講演、そしてエクスカッション風景が甦ってまいります。また、春の役員会終了後といい、全国大会といい、懇親会での楽しかった交流は、忘れがたい思い出として大切にいたします。呑兵衛の代表にお付き合いくださった心優しい方々、至福のひとつ時をありがとうございました。

新代表と新たな役員体制のもと、文学・環境学会／ASLE-Japanがますますの発展を遂げることを信じて、四年間のお礼の言葉といたします。

**2012年度
第18回ASLE-Japan/文学・環境学会
全国大会プログラム**

日時：2012年8月31日（金）～9月1日（日）

会場：近畿大学本部キャンパス BLOSSOM CAFE 3Fスペース

（〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1）

大会実行委委員：辻和彦（近畿大学）、浅井千晶（千里金蘭大学）、塚田幸光（関西学院大学）

8月31日（金）

▽09:45-12:15 【オブショナル・メニュー】
読書会「エコクリティシズムの『今』を読む：L・ビュエル、U・ハイザ、K・ソーンバー
“Literature and Environment”
企画：山田悠介（立教大学・院）他

▼13:00-13:10 開会の辞：辻和彦（近畿大学）

▼13:10-13:40 個人発表1
司会：吉田美津（松山大学）
「音のない自然——Typeeの風景を読み解く」
小椋道晃（立教大学・院）

▼13:40-14:10 個人発表2
司会：吉田美津（松山大学）
「動物の<かたり>：<語る>ことと<騙る>こと」
山田悠介（立教大学・院）

▼14:10-14:40 個人発表3
司会：小谷一明（新潟県立大学）
「ネイチャー・フェイカーズ論争の真実～汚名を着せられたアーネスト・T・シートン」
茅野佳子（明星大学）

▼14:50-16:30 シンポジウム1「古典と環境」
司会：辻和彦（近畿大学）
吉岡ちはる（近畿大学）、高橋綾子（長岡技術科学大学）、
塩田弘（広島修道大学）、浜本隆三（徳島文理大学）

▼16:40-18:10 大会基調講演
司会：村上清敏（ASLE-Japan代表、金沢大学）
講師：渡辺利雄（東京大学名誉教授）
演題：「Human/Nature/Writing
—ソロー思想の順列組み合わせ」

▽18:50-懇親会
会場：あ・じゃぼん（和食・創作料理）
近鉄八戸ノ里駅改札口から道路を渡ってすぐ
（大阪府東大阪市小阪2-13-23）

9月1日（土）

▽09:30-11:30 役員会
▼12:20-12:50 総会
▼12:50-13:20 個人発表4
司会：小谷一明（新潟県立大学）
“Desire Trails into the Edgelands--Contemporary
Landscape Writing in the U.K.”
John Rippey（立教女学院）

▼13:20-13:50 個人発表5
司会：塚田幸光（関西学院大学）
「ディヴィッド・アーモンド『ヘヴンアイズ』における
“vision”の変容と自然表象」
内藤貴子（日本女子大学・院）

▼13:50-14:20 個人発表6
司会：塚田幸光（関西学院大学）
「生命圏に対する人間の責任の基礎—ハンス・ヨナスにお
ける生命論の展開—」
戸谷洋志（大阪大学・院）

▼14:30-16:10 ラウンドテーブル
「レイチェル・カーソン『沈黙の春』出版50年を記念し
て—カーソンに学ぶ」
浅井千晶（千里金蘭大学）、上岡克己（高知大学）、岩政
伸治（白百合女子大学）、多田満（国立環境研究所）、真
野剛（松山大学）

▼16:20-17:50 シンポジウム2「境界の食風景」
モデレーター：結城正美（金沢大学）
穴見慎一（東京農工大学・非）、河野千絵（日本大学・非）、
深水護（北海道大学）

▼17:50-18:00 閉会の辞：村上清敏（ASLE-Japan代表、
金沢大学）

9月2日（日）

▼10:00-13:00 上町台地研究調査
～環境、歴史、文化、社会の多角的視点から都市を再考
する～ 地下鉄堺筋線「恵美須町駅」南改札口に10:00
に集合、出発。

■求ム！ 参加者！

ASLE-Japan / 文学・環境学会2012年度全国大会特集 辻 和彦

こんにちは。ASLE-Japan / 文学・環境学会の大会実行委員の辻です。

2012年度大会は8月31日から9月2日まで、大阪の近畿大学本部キャンパスで開催されます。今回も例年に劣らず、非常に盛沢山なプログラムが用意できることになりそうですので、ニュースレターで少しでも多くの会員の方々にお知らせできればと思い、この「大阪大会」について一つのコーナーを作成してみました。

<学会発表などのプログラムについて>

8月31日と9月1日の両日は、例年どおり学会発表を中心としたプログラムになります。6つの個人発表、1つの読書会、1つのラウンドテーブル、2つのシンポジウム、そして1つの大会基調講演が予定されています。これらの企画を用意して下さったコーディネーターの方々から、どのような興味深い展開を予定されているのか、またどのようなオーディエンスとフロアで活発な議論がしたいのかについて、以下のような文章を寄せていただきました。ご紹介させていただきます。

●読書会

I コクリティシズムの『今』を読む：L・ビュエル、U・ハイザ、K・ソーンバー
“Literature and Environment”
企画代表：山田悠介（立教大学・院）

本年、2012年はASLE-US設立20周年にあたりますが、実質的にそこから始まったといえる「エコクリティシズム」は、これまで様々な研究分野へと広がりを見せながら多様に進化／深化してきたと言えます。半面、その全体像をマッピングすることは、現在では難しい作業になりつつあり、「それで、『エコクリティシズム』ってどういう批評なの？」と問われた際に、うまく答えられない、もしくは十分に説明しきれずに戸惑いを覚える方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。

昨年、The Annual Review of Environment and Resources誌の第36号に、一篇の論文が掲載されました。そのタイトルは、“Literature and Environment”。環境工学や保全科学を専門とする同誌の性格上、いささか場違いなタイトルのようにも思えますが、内容は文学／文化研究者ではない読者へ向けてエコクリティ

シズムの概要をわかりやすく説明するものとなっています。とは言え、その錚々たる執筆者(しかも3名!!)、そして優に100を超す参照文献の数を見ると、それが辞書的にエコクリティシズムの流れをただ概説したのではないことはすぐにうかがえます。むしろこれまでのエコクリティシズムの広がりを踏まえた上で、何が問題となっているのか、そして今後は何が論じられるべきなのかという、この「批評理論」の「今」を問う問題意識にあふれた論文となっています。(論文の要旨と詳細な書誌情報につきましては、<http://www.annualreviews.org/doi/abs/10.1146/annurev-environ-111109-144855>に記載されていますので、こちらをご覧くださいと思います。)

今回の読書会では、本論文を「場所」「科学」「ジェンダー」「(ポスト)コロニアリズム」「土着性」「動物」のテーマごとに発表形式で読むことによって、エコクリティシズムの現状認識を共有すること、そしてそこに見られる問題点などについての議論を、参加者の皆さんと気楽に行えればと考えています。一応院生組織の主催という形で行いますが、上記のテーマに代表されるエコクリティシズムという批評ジャンルに関心のある方、もしくはその性格についてどのように把握すればよいのか疑問に思われている方、さらにご自身の研究分野とも関連させて色々話し合ってみたい方など、多くの方々の参加をお待ちしております。現在、ASLE-J会員の方々から発表をご担当頂ける方を募集しておりますので、発表をご希望の方、読書会に少しでもご興味をお持ちの方は、院生組織代表の山田悠介(yamayama030303@gmail.com)までご連絡いただければと思います。またオーディエンスとしての当日のご参加も大歓迎です。この読書会が、ASLE-Jという日本の立場からエコクリティシズムについて考える良い機会となることを楽しみにしております。

●ラウンドテーブル

イチェル・カーソン『沈黙の春』出版50年を記念して——カーソンに学ぶ』
企画代表：浅井千晶（千里金蘭大学）

1962年9月に『沈黙の春』が出版されてからちょうど半世紀になろうとしています。『沈黙の春』の中で、カーソンは、化学物質による環境汚染・環境破壊に加えて、放射能汚染の危険性についても鋭い警告を発しています。この50年の間に、カーソンの予言通り、世界各地で多くの環境問題が発生し、さらには昨年3月11日、東北地方太平洋沖地震に続いて起きた福島第一原発の重大事故によって放射能の怖さが身近な現実となってしまいました。カーソンならこのような事態にどう対応すればよいと考えたでしょうか？『沈黙の春』最終章「べつの道」で、カーソンはライフスタイルの問い直しを提案しています。

『沈黙の春』は農業行政の転換を促しただけでなく、近代の科学技術社会への論評として文化的にも相当な影響を与えていますし、強い意志で生き抜いた勇気ある女性エコロジストとしてのカーソンの存在感も見逃せません。このラウンドテーブルは、できるだけ多くの視点からカーソンを見つめ、自由に語りたという意図で企画しました。カーソンの時代を先取りする警告がタイムリーな話題を提供してくれることを願っています。カーソンの警告が現実となった今、彼女の考えを再認識しながら、それぞれが今の現象にどう向き合うのか、環境文学研究に関わる人間として何ができるのかを考える機会にしたいと思っています。また、カーソン（とその著作）をどのように教えるのかについても、具体的な意見交換ができればよいと思っています。

●シンポジウム

境 界の食風景』

企画代表：結城正美（金沢大学）

このシンポジウムは、会誌『文学と環境』16号（2013年刊行予定）の一部をお借りして企画した小特集「境界の食風景」の前哨戦です。洋の東西を問わず学会誌が特集を組むことは少なくありませんが、ASLE-Japanでは初めての試みです。何が特集にふさわしいのか逡巡し、〈食〉をテーマとすることに決めました。食は2010年秋にソウルで開かれたASLE韓日シンポジウムの大テーマであり、東アジアのエコクリティシズ

ムの関心と重なるところがある、と考えたのが理由の一つ目です。もうひとつの理由は、食が研究実践と日々の暮らしの営みの双方からアプローチされるべき問題であるからです。無論、どのような研究も日常との関わりを絶たれたかたちでは十分に遂行されませんが、こと食に関しては、それなしでは文字通りいのちがもちません。食は、持続可能な生の営みの根幹を成すと同時に、持続可能な研究にも深く関わる位相ではないでしょうか。なお、このシンポジウムは専門分野の異なる発表者で構成されるという意味で、ASLE-Japanが常々主張する学際的研究の実践を試みるものでもあります。さまざまな意味で〈試み〉の企画、会員のみなさまからフィードバックをいただけると有り難いです。

●シンポジウム

古 典と環境

企画代表：辻和彦（近畿大学）

今回のこのシンポジウムの主題は「古典と環境」であり、あえて今一度「古典」（映画古典など文学以外の文化表象も含む）と、環境、自然の問題や視点を照らし合わせ、この相関関係から何が浮かび上がるのか、という問題についてパネリストの方々に語っていただくつもりです。文学と環境というキーワードに関しては、既に「エコクリティシズム」という方法論が立派に確立しておりますし、「環境文学」というジャンルも広く認められているとおります。しかし今回は、そうした「既に確立した」手法や分野ではなく、むしろ「外部」に存在するかもしれない「オルタナティブ」なレトリックを用いて、環境や自然という視点から、今一度古典を読み直し／見直した際に、どのような新しい発見がありうるか、という探求を行ってみたいと思います。

パネリストの方々からは続々と、「仏教思想」、「田園」、「ファミリーヒストリー」などの興味深いキーワードから、この主題に挑むというご連絡を頂いております。文字通りの古典文学研究がご専門の方々を中心となりますが、同時に、現代思想、映画研究、伝記研究など多彩な御活動をされている皆様でもありますので、幅広いジャンルを横断したディスカッションが期待されます。厳しいスケジュールなので、十分な質疑応答時間はとれないかもしれませんが、こうした方向性での議論を聞いてみたい、もしくは、自分もその輪の中に加わってみたい、と思われる方は、ぜひ当日に会場まで足をお運びください。

●基調講演

H

 uman/Nature/Writing
 —ソロー思想の順列組み合わせ
 渡辺利雄先生

大会基調講演ですが、このたびは東京大学名誉教授の渡辺利雄先生に引き受けていただけました。英米文学研究における渡辺先生の御業績の広さ、御見識の深さについては、既に幅広く知られているとおりで、ここにあって記しませんが、『講義 アメリカ文学史——東京大学文学部英文科講義録』シリーズ（研究社）などの多くの御著書、御論文、また学会など研究組織での御活躍を改めて拝見させて頂くと、感嘆のため息ばかりがもれてしまいます。

今回はスコット・スロヴィック先生が東京大学に來校された折に語り合われた、「文学と自然」という主題についてさらに掘り下げ、先のシリーズの『補講』で論じられたお話の「続編」を拝聴させて頂けるということなので、先生のファンの方々はもちろんのこと、英米文学研究に身を置かれる方、「文学」と「自然」のいずれか、もしくは双方に御関心がおありの方にも、こぞって来ていただければと考えております。どうかこの貴重な機会をお見逃しなく！

大

 阪を歩く

エクスカージョン

9月2日は、これも本学会恒例行事のエクスカージョンです。

今回は大阪という「場所」を語る上で見逃すことができない地である「上町台地」を歩きます。

大阪の古い表記である「大坂」は、もともと上町台地の北端辺りを指す地名であり、巷の俗説では、この地に「坂」が多かったからだと言われています。上町台地は、古代には「難波瀉」と呼ばれる湿地に突き出した半島であり、現在もここだけが標高が高い丘陵となっています。古くは仁徳天皇が都とした「難波高津宮」が存在した地でもあり、その後も難波宮が二度造営され、何度も日本の首都となった場所でもあります。また西方に大阪湾を臨むそうした地形のためか、夕日を信仰対象とする西方浄土信仰の中心地であり、江戸時代の移転整備のせいもあって古くから寺社仏閣が多く、日本の諸都市と比較しても緑が非常に少ないといわれる現在の大阪都心部に属しながら、木々が豊かに生い茂る、独特の風情があるといわれる町です。台地内には織田作之助が愛した「天王寺七坂」、かつて酒

の醸造にも使われた「天王寺七名水」、大阪市唯一の滝であるとされる「玉出の滝」などの観光スポットや、太古の「磐座」であったとも言われ、「石山御坊」跡地でもある台地北端の地に豊臣秀吉が築城した「大阪城」、初代天皇である神武天皇が国土の神を祀り、伊勢神宮より永い歴史を持つ「生國魂神社」、菅原道真が太宰府に流される際に休息し、真田幸村が戦死したと言われる「安井神社」など歴史スポットが点在しています。

またその一角でもある「谷町」は、相撲などの「タニマチ」の語源ともいわれ、やはり様々な歴史的モニュメントがあります。その南方に位置する四天王寺は、聖徳太子が建立したと言われ、日本における仏教寺院としては最古のものであり、この地区が「京都より奈良より古い地」と言われる所以の一つでもあります。

四天王寺の南西には、1909年に開園した由緒ある天王寺公園があり、そのさらに西には「新世界」地区があります。新世界にはパリのエッフェル塔と凱旋門を模して建築されたという「通天閣」が聳え立ちますが、周辺から南東の空を見ると、2014年3月の竣工時には日本一高いビルディングとなる予定の「あべのハルカス」が、早くも周囲を睥睨するかのようになっているのが、眺められます。

台地の東側付近には、かつて存在した架橋「つるのはし」の記念碑があります。現在の「鶴橋」の由来でもあるこの「つるのはし」こそ、文献に残る日本最古の「橋」です。この周辺は古代から百済などから多くの渡来人が移住してきた「猪飼野」と呼ばれる地であり、「生野区」の一角となった現在も、日本最大の在日韓国・朝鮮人の集住地です。

ゆったりと「坂」を歩きながら、歴史と自然の織りなす浪漫を感じとってみませんか？

様々な歴史記念碑、建築物を眺めながらウォーキングを終えた後は、大阪グルメなランチを堪能していただけたらと思います。

どうぞいらっしゃってください！

<交通情報>

遠方からお出で下さる方の多くは、新幹線をご利用のことと思います。JR新大阪駅で降りられたら、地下鉄御堂筋線（この付近では地下ではなく地上を走っています）に乗り換え、「なんば駅」で降り、地下内を歩いてすぐの「大阪難波駅」から近鉄電車に乗車して下さい。近鉄奈良線の「八戸ノ里」か、近鉄大阪線の「長瀬」のいずれかで降りると、徒歩15分ほどで近畿大学本部キャンパスに到着いたします。

「八戸ノ里」からは本数は少ないですが、バス（近鉄バス）も運行しており、ご利用の場合は、「東上小坂」か「上小坂住宅前」で降りられれば、会場のプロッサ

ム・カフェはすぐそばです。

飛行機で来られる場合は、関西国際空港、伊丹空港のいずれから、「なんば」行きのリムジンバスが運行しておりますので、それをご利用頂き、やはり近鉄電車をご利用下さって来校して頂ければと思います。

北陸方面などからいらっしゃる方は、JR大阪駅で降りられるかもしれません。2011年春から大阪駅は「大阪ステーションシティ」として商業施設などを併設するようになり、巨大な片流れの大屋根を特徴とする、美しい都市空間としての「大阪の玄関」を演出するようになりました。お時間がお有りの方は、ぜひ「時空の広場」などで憩いのひとときを過ごされ、「ルクア」などでショッピングや映画観賞などを堪能して頂ければと思います。

ともあれJR大阪駅経由で来られる場合は、JR環状線に乗り換え、「鶴橋」で「近鉄鶴橋」にまた乗り換えて、先の「八戸ノ里」もしくは「長瀬」で降りられるか、もしくはJR大阪駅から地下街を歩き、地下鉄御堂筋線の「梅田」から乗車され、やはり「なんば駅」に向かわれるのがよいかと思われます。

<宿泊先情報>

大会中の宿泊先ですが、以下のホテルが、会場の最寄りの駅「近鉄八戸ノ里駅」、もしくは「近鉄長瀬駅」まで乗り換えなしで向かうことができる「大阪上本町」駅に接しており、設備面などを併せ考えると、最も便利で「近い」お宿です。

シェラトン都ホテル大阪：06-6773-1111

やはり乗り換えなしで、会場の最寄り駅から移動できる近鉄「大阪難波」駅、並びに「日本橋」駅付近は、日本最大面積ともいわれる繁華街「ミナミ」でもあり、道頓堀、かに道楽、グリコ看板が連なる観光地でもあります。「便利さ」、「近さ」を考慮しますと、この辺りにお宿を予約されるのをお勧めします。ホテルはたくさんありますので、ネットで検索などしていただければと思います。

また大阪も、他の都市と同様、近年温泉入浴施設付

きのホテルが増えて参りました。以下のものがそれらにあたります。

阪神ホテル：06-6344-1661

御堂筋ホテル：06-6644-1111

湯元「花乃井」スーパーホテル大阪天然温泉：06-6447-9000

堂島川温泉「天神の湯」ドリーミーイン梅田東：06-6311-9001

他にも数多くあるようです。夏の終わりに、学会出張ついでに湯治もされて、アタマはもちろん(!)、心も体もリフレッシュされてお帰りになれるのはいかがでしょうか。

<グルメ情報>

古くから「くいだおれ」の街として知られる大阪には、安くておいしいものを提供するお店が林立しています。たしかに「たこ焼き」や「お好み焼き」は代表的なB級グルメではありますが、この機会にこの街のさらに違う顔をご覧になるのもおもしろいかもしれません。歴史的経緯のおかげで、大阪には様々なバックグラウンドを持つ人々が混在しており、まさに「サラダボール」状態となっています。韓国料理や中華料理などの各国料理は安価に本格的な味が堪能でき、また沖縄料理など各郷土大衆料理も本場並みのものを味わうことが可能だとも言われます。大会開催中にぜひ、様々なエスニック「庶民」料理を、大阪で召し上がってみてください!

<その他>

なお心懸かりな計画停電などについては、まだ今後の詳細がはっきりしておりません。状況によっては、ある程度の変更もありうることを、あらかじめお断りさせていただきます。少しでもこの夏が、この日本にとって厳しいものでないことを共に祈りたいものです。

いずれにしても、この大阪大会は、「熱い」ものになるでしょう!

どうぞ、大阪へ「いらっしやい」!!

Popular Western Literature 【アメリカ西部大衆小説集】監修解説：山里 勝己（琉球大学教授）

Part 1 : The Nineteenth Century, 10vols. +別冊解説 ISBN 4-902708-04-3 定価 本体 152,000 円+税

Part 2 : 1900-1945, 9vols. +別冊解説 ISBN 978-4-902708-38-7 定価 本体 144,000 円+税

国際的な再評価が高まる大衆文学の中から代表的なアメリカ西部大衆小説をセレクト。

Ernest Thompson Seton: The Major Works 【シートン主要著作集】監修解説：野田 研一（立教大学教授）

Part 1 : 6vols. ISBN 978-4-902708-79-0 定価 本体 133,000 円+税

Part 2 : 3vols. ISBN 978-4-902708-80-6 定価 本体 72,000 円+税

Part 3 : 4vols. ISBN 978-4-902708-81-3 定価 本体 95,000 円+税

Part 4 : 4vols. ISBN 978-4-902708-82-0 定価 本体 95,000 円+税

自然学者、青少年教育者、先住民文化研究者など多才なシートンの本質に迫る主要著作をセレクト。

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区 4-33-18
TEL03-3946-2117 FAX03-5977-8026
www.athena-press.co.jp
sigyo@athena-press.co.jp

現代ネイチャーライターの横顔⑱

「アーサー・ビナード」

塩田 弘 (広島修道大学)

3. 11の大震災と福島での原子力発電所の事故から早くも一年以上の年月が経過した。被災地の復興がなかなか進まない中、大飯原子力発電所の再稼働をめぐる一連のプロセスがマスコミを賑わせ続けている。このような社会状況の中で、「核」に断固として反対の態度をとり続けている人は多い。アメリカ生まれの日本語詩人アーサー・ビナード (Arthur Binard、1967年-) もその一人である。

ビナードはアメリカのミシガン州出身で、大学卒業後の1990年来日し、日本語学校で小熊秀雄の「焼かれた魚」を教材として使用したことをきっかけに日本語での詩作を始め、2001年には詩集『釣り上げては』(思潮社)で中原中也賞を受賞した。2005年に『日本語ぽこりぽこり』(小学館)で講談社エッセイ賞を受賞し、翻訳、テレビ出演、公演などでも幅広い活動を展開している。福島第一原発事故後には広島市内に生活の拠点を移し、これまで以上に「核」について正面から取り組もうとしている。

ビナードが2007年に発表し、日本絵本賞を受賞した『ここが家だーベン・シャーンの第五福竜丸』(集英社)は、巨匠ベン・シャーンの「第五福竜丸事件」をテーマとする絵に詩をつけたものである。この絵本の最後には次のように書かれている。

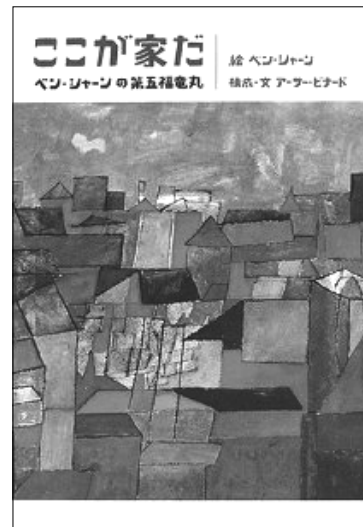
「ひとびとは 原水爆を なくそうと 動きだした。けれど あたらしい原水爆を つくって いつか つかおうと かんがえる ひとたちもいる。実験は その後 千回も 2千回も くりかえされている。」

「わすれたところに またドーン! みんなの 家に 放射能の 雨がふる。」

「どうして 忘れられようか。畑は おぼえている。」

「波も うちよせて おぼえている。ひとびとも わすれやしない。」

これらの原水爆実験について述べた短い文章は、原子力発電所の未来についても暗示しているように思えてならない。



成美堂研究図書案内

世界文学史はいかにして可能か New Literaly History Vol. 39 No. 3 2008	木内徹・福島昇・西本あづさ監訳 A5判並製・376頁	定価3,675円 (税込)	New Literaly History Vol. 39 No. 3 2008 の翻訳。グローバリゼーションによって変容した「世界文学」という概念をめぐる批評の試み。
アメリカ文学と戦争 - American Litterature and Warfare -	依藤通夫編・小倉いずみ・古原功・依藤朝子・ 滝口美佳・花田愛共著 A5判上製・276頁	定価3,465円 (税込)	本書はアメリカの文学と文人たちが戦争というテーマといかに取り組み、それをいかに描き出してきたかを考察する。
シェークスピア劇の傍白 - Modest Doubt -	内藤健二著 4/6判上製・140頁	定価1,890円 (税込)	傍白の研究を、セリフが誰に向けられたものであるかを出発点として捉え、傍白の分類に至っている。シェークスピア研究の基盤を震撼させる、問題提起の書である。
シオドア・ドライサーの世界 アメリカの現実 アメリカの夢	岩元巖著 4/6判上製・288頁	定価2,940円 (税込)	長年にわたって現代アメリカ文学を研究してきた著者がドライサーの全小説を論じつつ、彼の生涯の体験をあわせて、その世界を再構築しようとした力作である。
テキストの内と外 - Inside and Outside the Text -	東海英米文学会編 A5判上製・240頁	定価2,500円 (税込)	東海英米文学会の20周年記念論集で、文学テキストの内在的研究と外在的研究19編を収録。

他にも多数研究図書を扱っております。詳しくは以下のURLへアクセスしてください。
研究図書の自費出版承っております。 <https://www.seibido.co.jp/g00/g0000000.htm>

SEIBIDO

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-22
TEL.03 (3291) 2261 FAX.03 (3293) 5490

■ ASLE-J-Grad [院生組織より]

イギリス児童文学に描かれた自然回帰のイメージ

— Melvin Burgess, *The Cry of the Wolf* の場合

内 藤 貴 子 (日本女子大学・院)

イギリス児童文学をエコクリティシズムの視点から再読する作業を重ねるうちに、どうやらディープエコロジー以降の作品には、それ以前には描かれてこなかったタイプの自然回帰のイメージが描かれはじめたのではないかと感じている。人間や、人間の言葉を話す能力を得た動物が、言葉を失うか捨てるかして、命の大循環がおこなわれている世界、すなわち生態系や生物地球科学的循環そのもの——人間を圧倒して寄せつけない大自然の場合も、人間の生活圏に近く小規模で親和的な自然の場合もあるのだが——のなかへと還っていくイメージだ。

たとえば、センセーショナルなYoung Adult小説の書き手として知られるMelvin Burgessの*The Cry of the Wolf* (1990 [『オオカミは歌う』神鳥統夫訳, 偕成社, 1994年) では、文化や時代のパラダイムによってはpublic enemyとして狩猟の対象にされてきたオオカミと人間との関係性がきわめて現代的に捉え直され、ハンターが言葉を失い、その身体が食物連鎖のなかへと回帰していくイメージが鮮烈に示されている。

the wolfless eraの事実上の年代については諸説あるが、本作品では500年前に絶滅したはずの野性オオカミが生き延びていたという設定で、インドライオンや白サイなどの密猟世界旅行に飽き足りないハンターが、彼らを執拗に追いつめていく。希少野生動物への愛情や絶滅への危機感を獲得済みの現代読者であれば、イギリス最後の一頭を仕留めるという「なによりかがやかしい栄光」(22)を手にしようとするハンターの、卑劣なやり口での殺戮や、子オオカミの首をねじ折ったりオオカミたちを番号で識別したりすることにも象徴される非情さ、金灰色のイングランドオオカミ72頭ものトロフィーが並ぶ「死にみたまされた部屋」(171)などに震撼させられる。その一方で、仲間を思い合い、虐殺から逃走するためにプライドも捨てて行動するオオカミたちに共感しながら、知恵の限りを尽くしてひたむきに生きようとする命そのものの誇り高さも、感動をもって目の当りにする。

しかし本作品は、善悪を二元的に固定したり罪に罰

が与えられたりするような単純さが児童文学においても既に希少となった、ポストモダン世代の作品だ。オオカミがついに最後の一頭になったところで、オオカミとハンターの生存権が同等のバランスへと組み替えられ、ふたつの生命がせめぎ合いはじめると、どちらに加担するでもなく“hunting or hunted?”のあわいをスリリングに行き来する巧妙な語りによって、読者の共感は当然オオカミ側に残りつつも、視点は巧みに平等化されてしまう。ニュートラルな視線へと導かれた読者があくまでも客観的に目撃するのは、オオカミに銃をもぎとられ手を噛み砕かれて海に飛び込んだハンターが、月あかりのもと浜辺で待ち構えるオオカミを恐れて上陸をためらううちに失血し、砕けた手の肉を1ダースものカニについばまれて喰われながら、潮の流れにとらえられ深い海に呑み込まれていく結末だ。

ここでハンターが洩らすのが、他でもない、言葉にならない呻きである。崖の上に住む(しかし留守中の)隣人に助けを求める叫びが、カラスがなくような声、動物みたいな声だと語られることによって、ハンターは人間の言葉を失い、もはや人間でなくなりかけていることが衝撃的に示される。そして生きながらにして食物連鎖に取り込まれ、海のなかでの元素レベルでの生命体の分解すらも予感させつつ、命の大循環そのもののなかへと回帰していく。

重々しい沈黙のなかで読者が望むのは、最後の一頭のオオカミが物語の中盤で歌ったオオカミの歌——「見つけたら消滅させようという世の中では、危険きわまりない」(96)ため禁じられたが、大昔から受けつがれてきたオオカミの歌、「何百年ぶりかで、サセックスダウンズをこえてわたっていった」(96)遠吠え——かもしれない。しかしオオカミは沈黙したまま水辺まで迎えに行き、ハンターが逆らわずなされるままに深い海へ運ばれていくのを静観するのみだ。もちろんこのオープンエンディングは、どのようにでも読める。子どもの読者なら、ハイランドの西海岸に勝利の歌を響き渡らせるオオカミの姿を想像するかもしれな

い。大人の読者なら、オオカミが遠吠えをしないことで、これは勝ち負けや力の序列の問題ではないと悟るかもしれないし、オオカミの生活様式を伝えてきた社会が消滅してしまったことを、最後の一頭の存在論的な哀しみに重ねて痛感するかもしれない。あるいは、中世以来の人間中心主義によって権威づけられてきた人間の言葉が奪われる一方で、沈黙させられていた自然の声が蘇るといった短簡な構図を避け、苦々しい複雑な思いや矛盾、解決不可能性を孕んだままのポストモダン的な物語の閉じ方に、リアリティを感じるかもしれない。

イギリスには、イングランドのカンブリア州やスコットランドのハイランド地方などで語り継がれてき

た“the last wolf legend”がある。19世紀以降には、イギリス最後の生き残りのオオカミをハンターや王侯貴族などが仕留めるthe last wolfものとも呼べる一連の物語が、民間伝承から数多く派生した。The Cry of the Wolfは、この伝統のきわめて現代的なヴァリエーションとして位置づけることができよう。その現代性は、人間中心主義から見たオオカミの脅威、狩りの達成感、狩った者の英雄性を讃える過去の定型を脱し、人間とオオカミの生存権や命の重さを平等に捉える視点が導入されている点、さらには、そうした視点を導入することによって一層複雑化する自然と人間の関係性に係る問題を、単純化せず複雑なままに語る点などにあるのではないだろうか。

広報からのお知らせ

2012年5月はじめに、ASLE-J書誌情報更新版のアップロードが完了いたしました。アドレスは以下のとおりです。ご協力下さいました皆様、ありがとうございました。


<http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/>

今後も定期的に情報の更新をしておりますので、会員の皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の大野美砂 (misa@kaiyodai.ac.jp) までお送り下さい。次回の更新は2012年11月ごろを予定しております。具体的な締め切りなどにつきましては改めてご案内をさせていただきますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまで情報をお寄せいただかなかった方々からのご連絡もお待ちしております。どうぞよろしく願いいたします。

ASLE-J 広報委員 喜納育江、大野美砂、河野千絵



丸善・ユーリカプレス 共同企画 第1弾!

 EPM, JPN / 日本総代理店: 丸善

編集および日本語解説・英語序文: 大石和欣(名古屋大学)・出島有紀子(桜美林大学)

ナショナル・トラスト創設関連文献復刻集成 全5巻+和文解説

Foundations of the National Trust

Lives and Works of Octavia Hill, Robert Hunter and H.D. Rawnsley

2011年1月刊行 5 Vols., 2,488 p., Hard. ISBN 978-4-905211-00-6 通常価 ¥134,400[税込]

本叢書は、社会改革者オクタヴィア・ヒル女史、弁護士ロバート・ハンター卿、聖職者ハードウィック・ローンズリー師という、トラストの創立者たちが残した代表的な著作や書簡、および各人の生涯を描いた伝記を集成する初の復刻コレクションです。

 **MARUZEN**

丸善株式会社 学術情報ソリューション事業部 商品センター

〒105-0022 東京都港区海岸 1-9-18 国際浜松町ビル TEL: 03-6367-6079 FAX: 03-6367-6207

書誌情報

- 大塚由美子『マーガレット・アトウッド論——サバイバルの重層性「個人・国家・地球環境」』彩流社、2011年11月
- 金澤哲編著『アメリカ文学における「老い」の政治学』松籟社、2012年3月（塚田幸光論文所収）
- 管 啓次郎、林 ひふみ、清岡 智比古、波戸岡 景太、倉石 信乃『混成世界のポルトラーノ』左右社、2011年12月
- 高橋綾子・小川聡子編訳『現代アメリカ女性詩集』思潮社、2012年3月
- 高橋勤『コンコード・エレミヤ ソローの時代のレトリック』金星堂、2012年4月
- 中垣恒太郎『マーク・トウェインと近代国家アメリカ』音羽書房鶴見書店、2012年3月
- 波戸岡景太『動物とは「誰」か—文学・詩学・社会学との対話』水声社、2012年4月
- 藤江啓子『空間と時間のなかのメルヴィル——ポストコロニアルな視座から解明する彼の アメリカと地球（惑星）のヴィジョン』晃洋書房、2012年1月

〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-14
☎ 03-3814-0491 / Fax 03-3814-9250

音羽書房鶴見書店

http://www.otowatsurumi.com
e-mail:info@otowatsurumi.com

オルタナティヴ・ヴォイスを聴く	企画 エコクリティシズム研究会/監修 伊藤詔子	A5・408頁 定価 3,150円	アメリカ文学内のエスニシティとジェンダーを中心に読む、専門の執筆者40名による現代英語環境文学103選。
環境批評の未来 環境危機と文学的想像力	ローレンス・ビュエル 著/ 伊藤詔子・横田由理・吉田美津・三浦笙子・塩田 弘 訳	A5・272頁 定価 3,675円	環境批評の過去と現在を詳細に描ききり、「場所」の議論を深める中で環境批評の可能性を論じる批評集成の一書。
グリーンライティング ロマン主義とエコロジー	ジェームズ・C・マキュージック 著/川津雅江・小口一郎・直原典子 訳	A5 上製・448頁 定価 4,410円	イギリス・ロマン派の詩人からアメリカの環境文学作家まで、文学と環境を結ぶ批評の先駆的名著の待望の邦訳。
悪魔とハーブ エドガー・アラン・ポーと十九世紀アメリカ	池末陽子・辻和彦 著	A5・256頁 定価 2,940円	ポーの一生をたどりながら、ポーの作品とその世界がもつ意味を掘り下げて分析した論考を全三部九章に集成。
マーク・トウェインと近代国家アメリカ	中垣恒太郎 著	A5 上製・414頁 定価 4,200円	トウェイン研究の最近の動向を視野に入れつつ、近代国家イデオロギーと異文化をみる作家の眼差しについて考察。

地球温暖化と気候変動百科事典（第2版・全3巻）

Encyclopedia of Global Warming and Climate Change Second Edition Three-Volume Set

Edited by S George Philander Princeton University

September 2012 · 1712 pages

Cloth (978-1-4129-9261-9) Price £240.00 税込概算価格 ¥47,880

刊行特価 **£190.00** 税込概算価格**¥37,905** (2012年11月末まで)



本書は、2008年に刊行された第1版（ISBN: 978-1-4129-5878-3）に収録されている項目の半分以上を改訂し、40以上の新しい項目をあわせて全750項目をアルファベット順に収録する百科事典です。気候変動の科学的要因と社会への影響、歴史、産業・経済との関連、社会の役割など、地球温暖化と気候変動に関する基本的事項から応用、最新の知見までを含む、大変有用な資料です。環境学、環境社会学、環境経済学、地球科学などの分野でご利用下さいませ。

SAGE Publications Asia-Pacific Pte Ltd 日本代表事務所

〒604-0835 京都市中京区御池通高倉西入高宮町 216-204 TEL:075-253-6247 / FAX:075-253-6248



事務局より

<2012年度ASLE-Japan / 文学・環境学会 第1回役員会のご報告>

2012年5月26日(土、10:00～13:00)に、専修大学生田キャンパス(神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1)10号館5階105Rゼミ教室にて、2012年度第1回役員会が開かれました。まず、報告事項として、ニューズレターNo.31の発行とNo.32の進捗状況、会誌『文学と環境』第15号の編集方針および第16号小特集の進捗状況、新規入会・退会者、広報活動、院生組織の活動、コンピュータ委員就任と学会ホームページのリニューアル、2012年秋開催予定のASLE-Taiwan主催アジア圏ASLE合同シンポジウムについての報告がありました。続いて、審議事項として、2011年度決算報告および2012年度予算案、今年度全国大会のプログラム案、『文学と環境』「投稿規程」の改正、ASLE-Japan20周年記念出版事業、学会HPでの会誌またはニューズレターの公開および公開範囲、2012-2014年度役員改選について担当役員より説明があり、審議を経て各案が了承されました。また、資料「予算案に関する提案」に基づき代表・副代表より説明がなされ、支出超過傾向の会計状況改善に向け、会費納入の呼びかけ、全国大会運営費の経費削減、会誌出版費用の見直しなどに取り組むことが、審議の結果了承されました。

<会費納入のお願い>

2011年6月発行のNewsletter No.30 に添えて、会費納入のお願いをいたしました。会費未納の方は、至急、下記郵便口座へお振込みください。(一般5,000円、学生2,000円)

口座番号 01300-0-93821

加入者名 文学環境学会(フリガナ:ブンガクカンキョウガッカイ)

なお、2009年度より、他の金融機関からゆうちょ銀行への振替口座へ振込みができるようになりました。お振込みの際は、以下の項目を指定する必要があります。

銀行名:ゆうちょ銀行 金融機関コード:9900 店番:139 店名:一三九店
当座:0093821 受取人名:ブンガクカンキョウガッカイ



編集後記

窓から見える外の世界は、雨でほのかに霞んでいます。静かな水滴の音が室内にいても聞こえ、見えることのない水溜まりの存在が感じとれます。小さなものが一瞬光を反射して、放物線を描いたように見えたのは、蛙が跳ねたのでしょうか。誰もにとって煩わしい梅雨の季節に、今回もニューズレターを何とか送り出すことができました。会員の皆様のお手元に届くのは、初夏の頃となってしまうかもしれませんが、いずれにしても、様々な方々に原稿をお願いしたり、ない知恵を絞って企画を考えたり、組版作業に苦戦したり、編集委員はあいかわらず水溜まりを裸足で歩くような苦戦ぶりでした。それでも何とかゴールに達することができたのは、会員の皆様の暖かいご支援と、代表や事務局の頼もしい応援、そして編集委員間でお互いを尊重しあう気風が多少なりともあったからだと思えます。光溢れる夏の夜空に、私達が折った小さな紙飛行機が飛んでいくのが、雨に煙ったこの瞬間にも見えるような気がし、少しだけ何かを成し遂げたかのような、小さな喜びを感じずにはいられないのです。(編集委員一同)



【発行】

代表:村上清敏
事務局:札幌大学 豊里真弓
〒062-8520
札幌市豊平区西岡3条7丁目3番1号
Tel / Fax: 011-852-9617 (直通)
E-mail: toyosato-m@sapporo-u.ac.jp

【編集】

編集代表:辻 和彦
〒577-8502
大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学文芸学部
E-mail: twain1910@gmail.com